

悪女と追放されたので、

もう二度と家には戻りません

# Characters

Akujo to Tsuihou saretanode,  
Mou Nidoto Ie niha Modorimasen

ヴェルフリートの側近。  
幼少期から  
ヴェルフリートと育ち、  
彼が信頼する数少ない相手。

クラウス

ヴェルフリートの姪。  
辺境伯令嬢。  
人見知りだが、  
甘えん坊な性格。

ヴァルティーナ

フィオレッタの妹。  
従順で可愛らしい  
妹を演じる腹黒令嬢。

エミリア

エルグランド領を治める辺境伯。  
誠実で真面目で、  
領民のことを大切に思う為政者。

ヴェルフリート

「悪女」と仕立て上げられた、  
クラシエル公爵家の令嬢。  
婚約破棄と濡れ衣により  
王都から追放される。  
辺境の地で  
静かに生きようとするが……？

フィオレッタ

ルシアン  
フィオレッタの元婚約者。  
第三王子。

## 第一章 婚約破棄

公爵令嬢フィオレッタ・グラシエルが居間の扉を開けると、両親と妹のエミリア、そして婚約者である第三王子ルシアンが揃っていた。冷ややかな視線が一斉に彼女に向けられる。

「来たな、フィオレッタ」

父の声は硬い。その隣で母はフィオレッタを睨みつけ、エミリアの肩を撫でている。

「皆を待たせて……本当にあなたはのろまね！」

起きてすぐに準備をしたというのに。呼びつけたときにはすでに全員揃っていたのだろう、いつだってフィオレッタは後回しだ。

「お前、なんという真似をしたのだ」

父が呆れたようにため息を吐く。

昨日起きた出来事に、フィオレッタ自身に落ち度があったとは思えない。

「……どういう意味ですか？」

「ルシアン殿下の書類を勝手に持ち出した挙句、殿下とエミリアの仲を侮辱したそうではないか」

「違います！ あの書類は殿下ご自身が――」

「黙りなさい！」

フィオレッタの言い分を遮って、父の怒声が響く。

「お前は昔からそうだ。言い訳ばかりして、可愛げというものが無い！」

「お父様……」

「いいか、フィオレッタ。お前の行いはすでに社交界でも噂になっている。男を惑わせ、妹を虐め、公金を使い込んだ悪女だとな。さらに機密文書を持ち出していたなどと知れたら、我が公爵家の威厳に関わる問題だぞ！」

「ああ……本当に嘆かわしいわ。悪女だなんて穢らわしい！」

母はまるで汚れを見るように冷たい視線を向ける。

妹のエミリアは悲しげに俯きながら、小さく呟いた。

「お姉様……ごめんなさい。でも、わたし、殿下をお慕いしてしまったのです」

いつも通り、庇護欲をそそるようなキュルンとした上目遣いだ。その声は震えているが、涙は一滴も流れていない。むしろその横顔にはどこか勝ち誇った影があった。

「ああ、かわいそうなエミリア！ フィオレッタが怖くて言い出せなかったのね」

どう考えても不貞を働いたのは妹なのに、母はエミリアをなぐさめてフィオレッタを睨みつける。いつものことだから、もう何も期待はしていないけれど。

「僕はエミリアを愛しているんだ！」

ルシアンはそつとエミリアの手を取ると、涼しい笑みを浮かべてフィオレッタの方を見た。

「婚約の形式上、フィオレッタに義理を果たそうとしたが、昨日の出来事を受けて決心した。あの茶会で男と密会をしていたのだから？ 君のようなふしだらな悪女とは未来を築けない」

「神に誓って、そのような行動はしておりません」

「うるさい！ 見ていた者が教えてくれたんだからな！」

その言葉が刃のように胸を刺す。

静まり返った空間で、誰もフィオレッタを庇う人はいない。

「フィオレッタ。お前との婚約は破棄し、僕は新たにエミリアと縁を結ぶ！」

ルシアンの言葉に、母は満足げに頷いた。

「まあ……なんて素敵なの。これも神の導きですわ」

「それは公爵家としてもこの上ない名誉です。ルシアン殿下、ありがとうございます」  
父もすぐに同意を示している。フィオレッタを援護する人間などいないのだ。

「——とんだ茶番ですわね」

ここにフィオレッタの居場所はない。

彼女はただ、目の前で微笑み合う二人を静かに見つめる。

（いつかわかり合えるかもしれないと思っていました）

ルシアンが椅子から立ち上がる。フィオレッタを見るその瞳には、もはや嫌悪の色しか宿っていない。  
ない。

「……機密文書の持ち出しについては、今回だけ不問としてやろう。公金の件についても、これか

ら妃となるエミリアを思えば公にはできまい……彼女に降りかかる火の粉は減らしたいからな」  
「ルシアン殿下っ」

ルシアンが根も葉もない事柄を持ち出して、やむにやまれないといった表情を見せると、それに對してエミリアは目を潤ませた。二人はじつとりと見つめ合う。

父と母もウンウンと微笑ましそうに頷くのみだ。

フィオレッタだけが知らない話で、皆が罪をなすりつけようとしている。

「……私には公金の使い込みをできるような権限はありませんでしたが」

「うるさい、罪人の言い分など聞けるか！ フィオレッタ、お前は二度と王都に足を踏み入れるな！ それで済ませてやるのだからありがたく思え！」

冷やかに告げられたルシアンの宣告に、父が小さく頷き言葉を継いだ。

「殿下、温情をありがとうございます。グラシエル家の名を汚した娘をこれ以上置いてはおけぬ。

今すぐこの屋敷を出て行け」

その隣でエミリアが両手を胸の前で組み、大きな瞳を潤ませ、声を絞り出すように言う。

「そんな、お姉様がかわいそうです……！ 悪女だなんて、きつと嘘ですわ！」

その言葉に、部屋の空気が一変した。

「なんて優しいんだ、エミリア」

「あなたは心まで美しいのね……」

称賛の声が次々と上がり、フィオレッタの存在は完全に掻き消された。

——この家では、誰も真実など見ようとしらない。

それならもう言葉も要らない。

「わかりました」

声は驚くほど静かだった。微笑さえ浮かべて、フィオレッタは深く頭を下げる。

「これまでお世話になりました。すぐに支度を整えます」

扉を閉め、廊下に出る。外から差し込む光がやけに眩しく感じた。

涙は出ない。胸の奥に残るのは、ただ乾いた痛みだけ。

(もう、泣いてなんてあげません。そんな価値もないもの)

フィオレッタは背筋を伸ばして歩き出す。足音が廊下に響くたび、心を締めつけていたものが少しずつ剥がれ落ちていくようだった。

\*\*\*

——時は少し遡る。

春の陽が、ロズベルト侯爵家の庭園に柔らかく降り注ぐ。

王都でも屈指の社交家として知られる侯爵夫妻の催す春の茶会には、貴族たちが色とりどりの衣装で集い、笑い声と香水の香りが花のように咲き乱れている。

楽士の奏でる弦の音が風に乗り、白砂の小道には薔薇の蕾が並ぶ。

その光景を見つめながら、フィオレッタは白磁のカップを持ち、完璧な微笑みを浮かべた。

(ルシアン殿下はどちらにいらっしやるのかしら)

先ほどまで隣にいたはずなのに、ふと目を離れた隙に姿を消していた。

「お姉様、ルシアン殿下にご挨拶したい方はたくさんいらっしやるのよ？ そんなにピリピリなさ  
らなくても、すぐにお戻りになるから安心してね！」

軽やかな声でそう告げたのはエミリアだ。

「ええ、そうね」

フィオレッタはカップを口元に運びながら、笑顔を崩さないように心がける。ピリピリしている  
つもりはないが、そう大きな声で言われると少し困ってしまう。

本来なら、こうした場には婚約者と来るのがマナーだ。

けれど、エミリアが『ぜひお姉様と一緒に行きたいの』と言いつ出したとき、両親は喜んで許可を  
出した。姉妹が仲睦まじいのは良いことだと、父はご満悦だった。

だから、ルシアンとエミリアと三人で来たのだ。

「エミリア様は天使のような御方だ……」

「本当に、姉妹でこうも違うとは」

背後から聞こえたささやきに、フィオレッタはそっと振り返った。目が合うと、彼らの表情が凍  
りつく。

フィオレッタはわずかに首をかしげ、できるだけ柔らかく微笑む。

深紅の髪と、ほんの少しだけつり上がった緑の瞳。妹と比べると威圧的に見えるらしく、こうし  
た話を聞くのは今に始まったことではない。

「何か、私の顔についているでしょうか？」

極力落ち着いた声を出すと、彼らはたじろぎ、慌てて頭を下げた。

「い、いえ、とんでもない！ フィオレッタ様は美しいお方だと感嘆しております！」

「そ、そうですとも！」

逃げるように離れていく背を見送りながら、フィオレッタは静かに息を吐いた。

やはり自分の笑顔は人を畏怖させてしまうらしい。ことさら柔らかい表情を意識しているつもり  
でも、あのように怯えられてばかりだ。

「どうしたのかしら、あの方々たら顔色を変えてるわ」

「ただ挨拶をただけよ」

「ふふっ、やっぱりお姉様はすごいわ。そのドレスもとてもお似合いよ！」

屈託のない笑顔を向けるエミリアに、どう返していいのかわからず、フィオレッタは曖昧に微笑  
んだ。

ドレスを選ぶ権利はフィオレッタにはない。

金糸の刺繍が走る紅色のドレスをまとった姿は、庭園のどの花よりも鮮やかだ。胸元が開きすぎ  
ていて、どう考えてもお茶会で着るには派手すぎる。

赤髪に赤いドレスだなんて、高圧的な印象を与えてしまう。母と妹にそう意見したけれど、当然ながら聞き入れられなかった。

『お姉様には、やっぱり深紅が一番お似合いだわ。殿下の隣に立つ方なんだから、誰より目立たなくつつやダメよ!』

そう微笑んだ妹の言葉を聞いて、母は『さすがはエミリアだわ、優しい子ね』と満足そうに頷いていた。

そうなれば、もうそれ以上意見をして無駄なのだ。反対すればエミリアが泣いて、フィオレッタは融通の利かない意地悪な娘だと悪者扱いされる。

(これまでもずっとそうだったもの。仕方ないわ)

けれども、もう少しでそれも終わるだろう。フィオレッタがルシアンと結婚したら、公爵家には戻らない。そうしたら、少しは心が楽になるはずだ。

「あつ、あつちにお友達がいるわ。お姉様、わたしご挨拶してくるわね!」

「ええ。気をつけてね。一緒に帰る予定だから」

「はあい。お姉様も楽しんでねえ」

エミリアはそう言つて軽やかに手を振つた。そして、裾を揺らして歩き出すと、すぐに彼女のもとに令嬢たちが集まってくる。

淡い桃色の髪がふわふわと踊り、笑顔を見せるたび空気を柔らかくしていく。若い令息たちは我先にと話しかけ、侍女たちでさえ仕事にもかかわらず、うっとりとその姿を見つめていた。

——まるで光の中心。

遠巻きにその輪を見つめていたフィオレッタは俯く。手にしたカップの中の茶がわずかに揺れるのが見えた。

誰も悪気があるわけではない。ただ、自然とそうなるのだ。

妹が笑えば、世界が明るくなる。

フィオレッタが同じように笑えば、『可愛げがない』と評されるだけ。

両親からの言葉を思い出し、フィオレッタは小さく息を吐く。

いつからだろう。誰かに褒められるより先に、妹と比べられるようになったのは。

どれほど努力しても、両親の視線は妹へ向けられる。

それでも、フィオレッタは諦めなかった。殿下の婚約者として恥じぬように、努力を積み重ねてきた。夜遅くまで勉強に励み、完璧であるよう自分を律してきた。

彼の隣にふさわしい人間でありたい。その想いだけでここまで来たのだ。

「フィオレッタ様」

名を呼ばれ、フィオレッタは振り返つた。ロズベルト侯爵家の侍女が、庭の奥から小走りに近づいてくる。

「殿下がお呼びです。奥の温室の方へお越しく下さいとのお言付けです」

「……ルシアン殿下が?」

「はい。お一人でお待ちとのことでした」

「わかったわ。すぐに向かいますね」

侍女の言葉に、フィオレッタの心がふわりと温かくなる。

このところ殿下とは公務や社交の場で顔を合わせるだけだった。久しぶりに二人きりで話せるかもしれない。そうしたら、心も晴れるかもしれない。

(ルシアン殿下、どうしたのかしら。わざわざそんなところにお呼びになるなんて) 思わず指先で頬を押さえる。ほんのりと熱い。

春の日差しがせいだらうか、それとも小さく弾む鼓動のせいだらうか。

淡い期待を胸に、フィオレッタは春の庭園をまっすぐに進んでいった。

人が集まっているエリアを抜けた先、まだ満開ではない薔薇園の奥にその温室があった。ガラスの壁面が光を反射して輝いている。

扉をそっと押すと、温かい空気が肌を包み込み、色鮮やかな花々の香りが鼻孔をくすぐる。

(殿下はどこにいらっしやるのかしら?)

フィオレッタはそっと奥へ歩みを進める。

けれど、彼の姿はどこにもなかった。そのとき、花の陰で何かが動いた気がした。

「ルシアン殿下ですか……?」

「おや、こんなところに来るとは。やっぱりお好きなんですわね」

呼びかけると、聞き覚えのない男の声が響く。

フィオレッタが慌てて目を向けると、そこには若い男が立っていた。整った顔立ちだが、酒の臭

いが強く、胸元のリボンも乱れている。

(……まさか、この方は)

白い革靴の金飾り、侯爵家の紋章入りのブローチ。

その特徴に心当たりがある。

ロズベルト侯爵家の次男、クラウドイオ。女遊びと酒癖の悪さで幾度も噂になり、社交界では放蕩者とうもうものとして有名な人物で、侯爵夫妻が頭を悩ませていると耳にした。

「……何をおっしゃっているのかわかりませんわ」

この人と関わるのは良くない。フィオレッタの頭に警鐘が鳴り響く。

強く否定したつもりだが、クラウドイオは軽薄そうな笑みを浮かべたままだ。

「おやおや、ここでは初心はつこころな演技は結構ですよ、フィオレッタ様。ここに来たのであれば、そういうおつもりなのでしょうから」

「私は人を捜しているのです。お引き取りを——」

言いかけたところで、クラウドイオがぐいと距離を詰めてきた。そして、検分するかのようになどてっぺんからつま先までじろじろと見つめる。

「そんなに構えないでくださいよ。あなたの噂はかねがね耳にっていて、お手合わせ願いたいと思っていたものだ」

「……噂ですって?」

酒の臭いが鼻を突き、気分が悪い。

「ええ、男を翻弄する悪女だとか。これほど美しければそれも仕方ないねえ」  
その言葉とともに、クラウドディオの指がフィオレッタの肩に触れた。

ぞっとするような感触に、思わず手が動いた。

「お戯れはおやめくださいませ！」

——バンツ。

乾いた音が響く。クラウドディオの頬に鮮やかな朱が浮かんだ。

「っ、この……！ 売女がお高くとまりやがって！」

彼の目が凶暴に歪む。まずいと思ったのも束の間、振り上げられた手がフィオレッタに向かってくる。

(叩かれる)

フィオレッタはそう思っ過ぎてゆつと目を閉じた。

だが、痛みは訪れない。代わりに、鋭い声が空気を裂いた。

「やめないか」

がしり、と何かを掴む音。

恐る恐る目を開けると、目の前でクラウドディオの腕がありえない角度にねじられていた。

「ぐっ、痛っ……な、何をするっ！」

「女性に手を上げるなど、男のやることか？」

低く唸るような声とともに、クラウドディオの腕をさらに締め上げ、そのままねじり倒す。

フィオレッタが視線を上げると、黒衣の軍服に身を包んだ長身の男が花々の間に立っていた。

銀の髪が陽光を受けて輝き、青い瞳は鋭さを帯びている。

その存在感に思わず息を呑んだ。先ほどまで甘い香りに満ちていた温室が、打って変わって戦場のような緊張に包まれている。

「どこの家の者か知らないが恥を知れ。さっさと失せろ」

「くそっ！ 覚えてろよ！」

腕を離されたクラウドディオは顔を歪めながら後ずさり、走るように逃げ出していった。酒を飲んでいいるからか、足がもつれて一度転び、また何か悪態をつきながら走り去ってゆく。

(助かった……のね)

フィオレッタはしばし言葉を失い、胸に手を当てた。指先が震えている。けれど、クラウドディオに殴られそうになった恐怖よりも——助けられた安堵が勝っていた。

「あの……助けてくださりありがとうございます」

ようやく絞り出した声にその人はゆっくりとこちらを見た。

その瞳が、静かにフィオレッタを射抜く。その眼光の鋭さにたじろいでしまう。

「……気をつけた方がいい」

「えっ？」

「この庭、やたらと入り組んでいる。迷子になると、厄介だ」

まるで先ほどの出来事など取るに足らないような口調で、その人はくるりと背を向けた。

フィオレッタはぼかんとしたまま瞬きをした。

「お待ちください……あの、あなたは」

呼び止めようとしたが、黒衣の男性はそのまま足早に立ち去ってしまった。

あまりにもあつという間で、今起きた出来事が現実なのかどうかもわからない。

(それに、迷子とはなんのことかしら……?)

意味のわからない忠告が耳に残る。

クラウディオの存在やフィオレッタがそこにいた理由には触れもせず、ただ颯爽と去っていった謎の男性。主要な貴族は把握しているはずの自分が知らないのであれば、彼は貴族ではないのだろうか。

そう推察しながら、フィオレッタは自らの両手を見下ろした。今になって、ひどく震えている。

あの謎の男性が助けてくれなかったら、今頃どうなっていたかわからない。

(……そうだわ、殿下と合流しないと)

フィオレッタはルシアンを捜すことにした。

きつと手違いで、別の場所に行っているのだろうか。

小さく息を吐き、乱れた髪を整える。袖口の汚れを払い、崩れたドレスの裾を直して、姿勢を正した。

温室のガラスに映る自分の姿を見て、ふつと苦笑する。ひどい顔だ。

(まるで、何事もなかったかのように……振る舞わなければね)

社交の場に生きる者にとって、動揺は弱さと同義だ。唇を引き結び、顔を上げる。

外では今も音楽が流れ、貴族たちの談笑が続いているはずだ。

こんなところで怯えていては、噂の種を与えるようなもの。

フィオレッタは背筋を伸ばし、そつと扉に手をかけた。

温室を出ると、柔らかな風が頬を撫で、乱れた心を少しだけ落ち着かせてくれる。

(一旦、元の場所に戻ろうかしら)

速まる胸の鼓動を抑え、庭園へ戻ろうとしたそのとき。

「まあ、お姉様？」

振り返ると、噴水のそばにルシアンとエミリアの姿があった。

エミリアは心底驚いたように目を丸くし、すぐに駆け寄ってくる。

(どうして二人が一緒にいるのかしら)

ルシアンが待っていると言われた場所で大変な目に遭ったのに、その近くで二人は談笑していた。寄り添うように立っている姿がフィオレッタの心に刺さる。

「どうしたの、お姉様。すつごく顔色が悪いわ!」

「そう、かしら」

「ええ、とつてもひどい顔よ。帰って休んだ方がいいわ。ルシアン殿下あ、お姉様をお送りしましょう?」

「いいえエミリア、私は大丈夫よ」

「ええっ、無理をしてもダメよ、お姉様！ ルシアン殿下もそう思うでしょう？」

ようやく目が合ったルシアンが眉根を寄せる。その瞳には心配よりも、冷やかな色があった。

「倒れられては侯爵も迷惑だろう。すぐに馬車を手配する。一人で帰れるな？」

「……ありがとうございます。申し訳ありません、それでは先に帰らせていただきます」

「ではな、フィオレッタ。ああ、明日も執務があるんだ、今日中に治せよ」

「……はい」

「フィオレッタ様、こちらに！」

ルシアンの言葉に、侍従の一人がフィオレッタを馬車の場所へ促す。

フィオレッタは丁寧と頭を下げ、二人から離れた。

「気をつけてね、お姉様っ！」

背後でエミリアの優しい声が続く。それが本心かどうか、もはや考える気力もない。

用意された馬車に乗り込むと、疲労がどっと押し寄せる。

まぶたを閉じると、温室での出来事と青い瞳の残像が交互に浮かんだ。

——あの人は、誰だったのだろう。

答えのない問いを胸に抱えたまま、馬車は石畳を静かに進んだ。

グラシエル公爵邸の玄関をくぐると、すぐに母の声が飛んできた。

「まあまあまあ、こんな時間に一人で帰ってくるなんて！ あなたは茶会ひとつまともにこなせな

いの？」

「申し訳ありません。体調が優れなくて」

「それなら最初から行かなければいいでしょう。ああ本当に困った子ね……エミリアがうまく尻拭いしてくれるでしょう」

棘を含んだ声色に、フィオレッタの心はさらに重くなる。

母はいつもそうだ。フィオレッタを心配する言葉はひとつもなく、エミリアだけを褒める。血がつながった家族なのに、明確な線引きがしてあるようだった。

（特にひどくなったのは、お祖母様が亡くなってからだわ）

フィオレッタは言葉を呑み込み、礼だけして部屋へ戻った。ルームシューズに履き替えようと靴を脱ぎかけたところで、机の上の書類が目に入る。

（そうだわ……この書類）

それは、ルシアンが放置していた執務書類だった。自分の執務室の机に書類が山積みになっていたのは恥だと言って、フィオレッタに強引に持ち帰らせたものだ。

機密文書を持ち出してはいけないと何度も伝えたけれど、ルシアンは頑として聞かなかった。

体調は悪いが、このままでは問題になる。

「……こっさり返しに行くしかないわね」

そう決意して机の上の書類を抱えたとき、控えめなノックの音がした。

「お嬢様、もうお休みになられるのではなかったのですか？」

入ってきたのは、年配の侍女リゼだった。

若い頃からグラシエル家に仕え、フィオレッタが物心ついた頃からずっとそばにいる。この冷たい公爵家の中でただ一人、自分を『お嬢様』と呼び続け、昔から変わらず敬意をもって接してくれていた。

「少し仕事を片付けてからにするわ」

「お顔の色が優れません。お休みになった方が良いのではありませんか」

「大丈夫。明日にはきつと落ち着くもの」

そう言っただけで、リゼは眉尻を下げたまま首を振る。

「お嬢様、どうかご無理だけはなさいませぬように。他の誰も見ていなくとも、私は見ております。お嬢様がどれほどお辛い思いをされてきたか……」

その静かな言葉に、胸がかすかに締めつけられる。

「ありがとう、リゼ。でも本当に大丈夫よ。殿下のご機嫌を損ねてしまつては、もっと厄介だから」

「ではせめて、道中お気をつけてくださいませ。私も一緒にいたします」

「いえ、あなたは忙しいでしょう？ 馬車の用意だけしてくれる？」

「……かしこまりました」

リゼは少し不服そうながらも一礼すると、すぐに出発の支度を整えに行つた。彼女の背中を見送りながら、フィオレッタはほんの少しだけ安堵を覚える。

この家で、自分を気にかけてくれる人がまだいる——その事実が唯一の支えだった。ドレスの上にシヨールを羽織り、鏡の前で髪を整える。髪を下ろす前で良かった。鏡の中にいるフィオレッタの顔色は悪い。それでも、いつものように口角を上げた。

夕刻の王都は、茜色に染まっていた。

馬車の窓越しに見える王城は、沈みゆく太陽を背に金の輪郭を帯びて輝いている。

誰もが帰路に就くこの時間に、フィオレッタはただ一人、城へ向かう。

(これを返却したら、すぐに帰りましょう)

疲労を押し込め、フィオレッタは馬車を降りた。

衛兵たちは慣れた様子で敬礼をし、書簡を確かめる。殿下の婚約者である彼女が書類を届けに来るのはもはや日常の風景となっている。

(殿下は執務室にはいらつしやらないはず。今のうちに机に置いてこよう)

フィオレッタが城にいないときには、ルシアンは執務室にはほとんど寄りつかないと聞いている。出来上がった書類に印を押す仕事で、発生しないからだ。

誰にも会わずに済むようにと願いながら、フィオレッタは小さく息を吐いた。

執務室の扉の前に立つと、日差しがちょうどその取っ手を照らしていた。

ふと、内側から声が聞こえる。

「……もう少しこちらを向いて。そう、上手だ」



耳を疑った。

いつも自分に向けられる冷淡な声とは違う。低く、甘く、誰かをなだめるような調子。そして、そのすぐ後に聞き慣れた声があった。

「そんな……殿下、誰か来たら……」

「心配はいらない。ここには誰も入ってこないよ」

視界が揺らいで、思考が追いつかない。

(そんな……まさか)

フィオレッタは書類を抱えながら、震える指先で取っ手を押した。

扉が静かに開く。

夕日が差し込む執務室の中、長椅子でルシアンとエミリアが寄り添っていた。

——自分の婚約者の唇が、妹のものに重なっている。

信じていた世界が音を立てて崩れ落ちていく。

「ルシアン殿下……?」

震える声で呟くと、ルシアンが振り返った。そして驚くより先に苛立ちがその瞳に宿る。

「フィオレッタ！ 僕の部屋に勝手に入ってくるとは、どういっつもりだ！」

「明日の執務に必要な書類をお持ちして……」

「口答えをするな！ 君は王族への礼儀を忘れたのか!」

突き刺さる言葉に、心が冷えきっていくのがわかる。

エミリアは殿下の腕を小さく握り、伏し目がちにささやいた。  
 「お姉様、ごめんなさい……わたし、ルシアン殿下を好きになってしまっ……っ」  
 「ああ、可愛いエミリア。そんなに怯えて……。フィオレッタ、いつまでそこにいる。さっさと去らないか！」

フィオレッタはびくりと肩を震わせる。まるでこちらが悪者みたいだ。  
 ただ机に書類を置き、深く一礼する。

「お仕事の書類はお返ししました。……それでは、失礼いたします」

扉が静かに閉まる。

その音とともに、フィオレッタの中で何かが終わった気がした。

\*\*\*

——そして、現在。

執事や侍女たちが遠巻きに視線を向けるが、婚約破棄と公爵家からの追放を告げられたフィオレッタに声をかける者は誰一人としていない。

すべてがいつもと同じはずなのに、この場所は自分の居場所ではないという思いが強くなる。

すぐに荷造りを済ませたフィオレッタは、馬車へ歩み寄った。庭の花々が風に揺れているのが目

に入り、鳥の声が遠くに聞こえる。

御者が静かに頭を下げた。その隣には涙を浮かべたリゼがいる。

「お嬢様……なんてひどい……！」

「私のために泣いてくれるのはあなただけよ、リゼ」

「きつと、きつと旦那様たちは後悔いたします。……でもお嬢様にとってここが良い場所であるとは思えません」

リゼは怒りを露わにしてくれる。実の母よりも母親のような、フィオレッタにとって大切な人だ。

「さて、どこに行こうかしらね」

フィオレッタがそうこぼすと、リゼは懐から紙を取り出す。

「お嬢様。エルグランド領の町に娘夫婦がおります。娘に手紙を書いたので、そこに向かわれるのはどうですか？」

「ありがとう。どこに行くかは決めていなかったから助かるわ」

ただ王都を出て行けるならどこでもいい。

フィオレッタはリゼから手紙を受け取ると、御者に行き先を告げた。王国の北方に位置するエルグランドは遠い土地になるが、かえって好都合だ。

（私を知っている人が誰もいない場所で、また一から始めよう）

王都から離れば離れるほど、フィオレッタを知っている人は減っていく。

殿下の元婚約者でも、公爵家から追放された娘という肩書きでもなく、ただの一人の人間として

生きられる場所へ向かうのだ。

「お嬢様、お元気で……！」

「ええ、リゼも体には気をつけてね」

別れの挨拶を交わすと、馬車がゆっくりと動き出す。石畳の振動が伝わるたび、本当にここから旅立つのだという実感が湧いてくる。

(……なんだか、清々しい気持ちだわ)

知らない土地にたった一人で向かう不安は、もちろんある。けれどそれ以上に、これまで感じたことのない胸の高鳴りがあった。

窓から見える王都の街並みがゆっくりと遠ざかっていく。

フィオレッタは背筋を伸ばし、まっすぐ前を見据えた。その瞳にはもう、迷いも、怯えもない。

(誰のためでもなく、自分のために生きていく。今度こそそうするわ)

そう決意して、フィオレッタ・グラシエルは王都を去った。

## 第二章 エルグランド辺境伯領

朝靄あさもろの残る町道に、鳥のさえずりが響いている。

「今日もいい天気ね」

窓から差し込む朝日の眩しさに、フィオレッタは目を細めた。

辺境の町、リントブル。

ここで「フィオ」と名を偽って暮らすようになって、もうひと月が経つ。

王都を出た日に誓った言葉は、今も心の奥で静かに息づいていた。

自分のために、まっすぐ前を向くと決めた。

「フィオちゃん、朝ごはんできてるよー！」

「はい、すぐに行きます！」

階下から聞こえてくるのびやかな声に、フィオレッタは急いで返事をした。

この地を訪ねた日。この町で一番大きな宿屋を営む夫妻は、リゼからの手紙を読むと、目を見張り、すぐに温かな笑みを向けてくれた。

聞けば夫妻も王都から出てこの辺境の地に移り住んだ経緯があるそうだ。

フィオレッタはこの宿屋の一室を借りて生活を始め、領民となる手続きも、夫妻が手早く済ませ

てくれた。

フィオレッタが元公爵令嬢だという過去は、この夫妻だけが知っている。すぐに娘用の服を集めて、フィオレッタを迎え入れてくれたこの家族には感謝しかない。

最初は夫妻も戸惑っていたが、フィオレッタは自分から一平民として扱うようお願いした。今では『フィオちゃん』と呼ばれて少しくすぐったい。

(急がなくてはね)

屋敷にいたときと違い、手伝ってくれる侍女はいない。もともと、あの屋敷でもフィオレッタの世話をしてくれるのはリゼしかいなかったたので、ある程度は一人でできるようになっていた。

簡素なワンピースに身を包み、髪をひとつに結ぶと急いで階段を駆け下りた。

「おはようございます、マルタさん」

「おはよう、フィオちゃん！ 今日のスープがとってもおいしくできたのよ。冷めないうちにどうぞ！」

リゼの娘であるマルタに声をかけて、スープ皿を受け取る。木のテーブルでは、茶髪の双子がすでにパンをちぎっていた。

リゼの孫のニコルとトールはそっくりな笑顔で、両頬にはパンくずがついている。

「フィオはねぼすけだな！」

「フィオ姉ちゃん、おはよう！」

少し生意気なのが兄のニコル、礼儀正しい方が弟のトール。八歳の双子の兄弟だ。

最初は二人に人見知りをされてしまったけれど、今ではすっかり慣れたものだ。

「おはよう。二人とも、朝から元気ね」

ニコルの言う通り、今日はちよつと起きるのが遅くなってしまった。

「こーらあなたたち！ フィオちゃんは夜遅くまで繕いものをしてくれたんだよ！ あんたたちがすーぐ大きくなるから！」

マルタさんがカウンタからひよいと顔を出して二人にそう言うと、双子はさつとフィオレッタの方を見た。

「フィオ姉ちゃん、ありがとう」

「どういたしまして、トール」

「おいまさか、し、下着まで……？」

「もちろん下着もちゃんと繕ったから安心してね、ニコル」

「げー！！」

二人に微笑むと、トールはにこにここと笑みを浮かべ、ニコルは大声で騒ぎ出した。どうしたというのだろう。そんなに嫌だったのだろうか。

正直なところ、こうして市井に出たところで、フィオレッタは何もできないと思っていた。でも、刺繍を頑張ってきたおかげで繕いものはできたし、読み書きや計算スキルも町では重宝される。

(本当に……毎日ありがたいわ)

町の人たちはちよつとしたことでも、フィオレッタに感謝の言葉をかけてくれる。

そうした経験がなさすぎて、フィオレッタはいつも、たまらなく嬉しくなる。

「ほおら、ニコル。綺麗なお姉さんにパンツを見られて恥ずかしいのはわかったから、パンでも食って落ち着くといい」

厨房から声を上げたのはマルタの夫のヨエルだ。たくましい腕に焼きたてのパンが並んだ天板を持ち、額にはうつつすら汗が光っている。

「父ちゃんはヨケーなこと言うな！」

「わはは！ かわいいなあニコルは」

「父ちゃん、ボクは？」

「お？ そりゃあもちろんトールもかわいいさ！」

「えへへ〜！」

プリプリと頬を膨らませるニコルと、嬉しそうなトール。そしてそんな二人を見て愛おしげに眉尻を下げる宿屋の主人。

そんな三人を見ていると、フィオレッタの頬も自然と緩む。

「フィオちゃん、ちゃんと食べてる？ いくら食べても細っこいから心配だわ」

マルタが隣に座り、フィオレッタを心配そうに覗き込んでくる。その困り顔に、いつも優しくかつたりぜを思い出し、泣きそうになってしまう。

（ここは、とても温かいわ）

「はい。いただいています」

「フィオちゃんの口に合わないかもしれないけど……いやでも、材料は質素でも料理の腕には自信があるからね」

「とてもおいしいです。それに、こうしてみんなで食事を取るの楽しいものですね」

フィオレッタは、笑顔でそう答えた。

社交辞令でもお世辞でもなんでもなく、心からそう思うのだ。

「フィオちゃん……。あつこら、トール！ どさくさにまぎれてこっそり野菜をニコルの皿に移すんじゃないよ！」

「あつ、バレちゃった〜」

「なにすんだよ、トール！」

マルタがトールを叱ると、ペロっと舌を出してかわいらしく笑っている。それにニコルがまた怒っている。

そんなやり取りを見ながら、フィオレッタはそっと笑った。

「本当に、仲のいいご家族ですね」

「仲がいいのかどうかは怪しいけどね。でも、喧嘩できるうちは平和なのさ」

マルタが肩をすくめ、照れくさそうに笑う。

笑いの絶えない家族を見て、フィオレッタはふと胸が締めつけられる思いがした。

叱るときも、褒めるときも、二人は子どもたちと同じ目線にいる。

——それが、家族というものの本来の姿なのだろう。

(ああ……私の家は、きつと少し、おかしかったのね)

母が妹を抱きしめる光景はよく覚えている。けれど、自分がそうされた記憶はほとんどない。そしてその理由を、フィオレッタはずっと言葉にできずにいた。公爵家にいた頃、フィオレッタを最も可愛がっていたのは前公爵夫人である祖母だった。

前公爵夫妻と折り合いの悪かった両親は、それが面白くなかったのだろう。フィオレッタが褒められるたび、母の視線は冷たくなり、父は見て見ぬふりをするようになった。エミリアが生まれた頃、祖父母は体調を崩し始めた。そしてフィオレッタが五歳のとき、二人は相次いでこの世を去った。

それを境に、家の空気ははつきりと変わった。

両親の関心は完全にエミリアへ向けられ、フィオレッタは余計な存在へと変わっていった。祖父母が生前に取り付けた婚約さえも、両親にとっては不満の種だったのだろう。

それでも、リゼだけは変わらなかった。彼女は祖父母の代から仕えていた侍女で、父にとっても無下に扱えない古参の使用人だった。だからこそ、フィオレッタに寄り添ってくれたのだ。

(家から離れられて、良かったわ)

もう痛みはない。針のむしろだったあの日々と比べたら、今はとても楽しい。

「そうだ、フィオちゃん。今日は教会のお手伝いだったっけ？」

マルタがスプ皿を片付けながら、ふと思いついたように尋ねる。

「はい。昼までに終わる予定です。午後はこちらに戻ってお手伝いできると思います」

今日もまた、温かな一日が始まる。小さな木製の窓からは朝日が差し込み、辺りをきらきらと照らしている。

(今日も、しっかりと働かなくちゃ)

そう心の中で呟いて、フィオレッタ——今はフィオとして生きる彼女は、食器を片付けて立ち上がった。

教会までは、宿屋から歩いて十五分ほどの距離だ。石畳を踏みしめながら、フィオレッタは胸いっばいに冷たい空気を吸い込む。

フィオレッタは定期的に教会を訪れ、掃除や花の世話、繕いものなどを引き受けていた。

王都では完璧な姿を求められていたが、ここではただのフィオとして過ごせる。その身軽さが、今の彼女には逆に心地よい。

ひと通りの奉仕を終えたら、ちょうど昼の鐘が聞こえてきた。

外に出ると、とてもいい天気だった。空を仰ぐと、青がどこまでも澄んでいる。

(いつもと違う道を歩こう。せっかくだもの)

フィオレッタは教会から続く小道を抜け、川辺の方へ向かう。

この町を流れる川は、リントブルの人々にとって命の水だ。

洗濯をする人、釣りをする子どもたち、談笑する老夫婦。のどかな日常の光景が広がっている。

「……？」

その静けさの中で、ふと、風にまぎれて小さな声が聞こえた気がした。

耳を澄ますと、すすり泣くような声が草の陰から届く。  
フィオレッタは足を止め、そっとそちらへ歩み寄った。

川辺の柳の木の根元に、小さな女の子が座り込んでいた。淡い亜麻色のくるくるした髪が風に揺れ、すみれ色の瞳が涙で濡れている。

その小さな腕には、縫い目が裂け、片腕の付け根から綿がのぞいているクマのぬいぐるみがとても大切そうに抱かれていた。

「こんにちは。どうしたの？」

フィオレッタがしゃがみ込むと、少女は驚いたように顔を上げる。

「くっ、クマちゃんが、こわれちゃったの……！」

そう言うと、少女はまたふわりとその大きな目から涙をこぼす。ポロポロとめどなく流れる大粒の涙に、フィオレッタは慌ててハンカチを取り出した。

「大丈夫よ、まずは涙を拭きましょうね」

女の子の涙をそっと拭くと、その子はこくりと頷き、じつとされるがままになっていた。

（ニコルやツールよりも小さいわ。あまり見ない顔ね）

フィオレッタはその小さな女の子をまじまじと観察する。

このひと月で、近くに住む人たちとは大体挨拶を済ませている。ニコルたちと同じ歳くらいの子どもたちが遊んでいるのを見かけるけれど、この子は初めて見る顔だ。

（着ているものも、いい生地のものだわ。この子がつけているものも、このぬいぐるみに使われて

いるリボンも質がいい）

近所の子ではないのかもしれない。もしくは、もっと特別な――

そこまで考えて、フィオレッタは思考を止めた。今はこの子を泣き止ませるのが先決だ。そう思つて、そっと手を差し伸べる。

「もし良ければ、そのぬいぐるみを私に見せてもらえるかしら？」

「……ウン」

声をかけると、少女はぬいぐるみをおおずと差し出した。

「かわいいクマさんね。……うん、これなら直せそうだわ」

「なおせるの……？」

少女のすみれ色の瞳が希望にきらめいた。頬には涙の跡が残っている。

「ええ。少しだけ待っていてちょうだい。針と糸は持っているの」

そう言つて、フィオレッタはポーチから小さな裁縫道具を取り出した。

薄紫の針山、細い金糸。令嬢教育で学んだ裁縫の技術が、こんな場所で役に立つとは思わなかった。

「おねえちゃま、まほうつかい？」

「ふふ、魔法じゃないのよ。ただの針仕事。ほら、こうして一針ずつ縫っていけばすぐに綺麗になるわ」

指先を動かすたびに、糸が意思をもつかのようにスイスイと布地を掬い上げていく。

裁縫は令嬢の嗜みとして仕込まれたが、フィオレッタは単純にその黙々とのめり込む作業が好きだった。

少女は息をするのも忘れたようにフィオレッタの手元を見つめる。

「はい、できたわ」

最後に糸を結び、ほつれた部分を丁寧にならす。

ぬいぐるみのクマは、すっかり元の姿を取り戻していた。

「わあ……すごい！ほんとうに、なおってる！」

少女の顔がぱつと明るくなった。ついさっきまで泣いていたとは思えないほどの輝くような笑顔に、フィオレッタはほつと胸をなで下ろす。

「ありがとう、おねえちゃま。あのね、わたしティナっていうの！」

涙で濡れた頬が、果実のように柔らかく色づく。小さな手でぬいぐるみをぎゅっと抱きしめる仕事草がとてもかわいらしい。

「ティナね。とっても素敵なお名前だわ」

「えへへ！おねえちゃまは？」

「私は……フィオよ」

「フィオおねえちゃま！」

ぱつと花が咲いたように笑うティナに、フィオレッタも思わず笑みをこぼした。

元気になったようで良かった。日ごろから裁縫道具を持ち歩いていたことに加えて、今日は川辺

の道を選択した。その両方が功を奏した。

「ねえねえ、フィオおねえちゃま。ティナね、いいところをしってるの」

「いいところ？」

「うん！ひみつのぼしよなの。おれいに、そこにあんないしてあげる！」

亜麻色のくるくるした髪が、風でふわりと踊った。

ティナのすみれ色の瞳が、いたずらっぽくきらめいている。

(秘密の場所……もしかしたら、そこにこの子の保護者がいるのかもしれないわ)

きつと、はぐれてしまつて捜しているに違いない。小さな子はパニックになりやすいから、できるだけ調子を合わせた方がいいとマルタが以前言っていた。

それに、このまま一人でいたら危険だ。

そう判断したフィオレッタは、ひとまずティナについていくことにした。

「それじゃあ、ティナ。その秘密の場所へ案内してもらえるかしら？」

「うんっ！こっちだよ！」

ティナは片手にぬいぐるみを抱え、反対の手でフィオレッタの手を握る。

フィオレッタは小さな手のひらの柔らかな温かさを感じながら、彼女の歩調に合わせて、小石の混じる川辺の小道をゆつくりと歩く。

すぐそばを流れる小川がさざめき、風が頬を撫でる。お昼時だからなのか、不思議と誰にも遭遇しない。

「こつちだよ、フィオおねえちゃま」

ティナは時折フィオレッタを見上げながら、ぴよんぴよんと軽やかに進んでいく。まるで春の妖精がこの地に遊びに来たみたいだ。

(まあ……こんなところに道があったのね)

一見すると茂みのような場所に、わずかに人が通れる空間がある。

その隙間を縫うように進むと、野原に出た。そしてそこには、視界いっぱいには花の海が広がっていた。

白いデイジー、黄色いタンポポ、薄紫の野スミレ。風が吹くたび、花々が小さく揺れ、淡い香りが空気の中に溶けていく。

「とても綺麗な場所ね」

フィオレッタは思わず息を呑む。

リントブルに来てからひと月、この場所に來たのは初めてだった。

野花のきらめきと小川の水音に包まれるこの場所は、まるで世界のどこにも属さないかのように静かで清らかだ。

「ふふっ、ね？　ここはね、ティナのひみつなの」

ティナは得意げに胸を張り、ぬいぐるみを抱きしめてくるりと一回転した。

亜麻色の髪がきらめき、春の陽の中でふわりと広がる。花びらが舞い上がり、そのひとひらがフィオレッタの肩に落ちた。

「ええ、とつても素敵な秘密の場所だわ」

ざっと見渡してみたが、ティナの保護者はおろか誰もいない。

(ティナを不安がらせてはいけないわね。ゆっくり聞いてみましょう)

「でしょ？　ここね、だれもこないの。だからねえ、いっしょにあそぼー！」

ティナはしゃがみ込んで、足元に咲く花を摘む。小さな手のひらに、春の花がいくつも重なっていく。

ぷくぷくのほっぺが髪の毛の隙間から見えて、その幼児らしい姿にフィオレッタは思わず笑顔になる。

「ねえ！　フィオおねえちゃま、みてみて！　このおはな、かんむりにできるかな？」

満面の笑みで花を差し出すティナの愛らしい姿に、思わず頬が緩む。

「ええ、きつとできるわ。ほら、茎がしなやかでしょう？　こうして編むのよ」

しゃがみ込んで、ティナの手元に自分の指を添えると、柔らかな茎を折らないように、そっと交差させながら輪をつくっていく。

「わあ……すごい！　フィオおねえちゃま、じょうずー！」

昔、礼儀作法の授業のひとつに、花飾りをつくる時間があった。貴婦人は、庭園で花を摘む姿も優雅でなければいけないとか。

実際、花を摘む機会はなかったが、その教えもこうして役に立った。

「ふふ、ありがとう。少しやったことがあって良かったわ」

「ふふふふふ〜！」

面白くなってくすぐすと笑うと、ティナもつられて笑い声を上げた。

その小さな笑い声が春風に乗って流れていく。

「わたしね、じょうずにできなくて、すぐにおはながほどけちゃうの」

「やろうとする気持ちが大切だと思うわ。今から一緒に頑張りましょう」

「うん、わかった！」

「ティナはどんな花を入れたい？」

「このしろいのと、きいろいのと、むらさきいろの！」

ティナは嬉しそうに野花を集め、スカートの上に広げた。

フィオレッタが手伝いながら、指先で花を編み込んでいく。やがて、二人の膝の上には色とりどりの花冠が並んだ。

「……よし、できたわ」

「ほんとだ！ ふたつもできたねえ」

「ええ。ひとつはティナのもの。もうひとつは、その子の分ね」

フィオレッタがティナのぬいぐるみを見つめると、ティナの顔がぱつと輝いた。

「クーちゃんとおそろいだ！」

「ふふ。おそろいって、嬉しいものよね」

クマのぬいぐるみの名前は『クーちゃん』というらしい。とてもわかりやすい名前だ。

ティナは花冠を頭にのせると、フィオレッタの隣に座り込んだ。

春風が二人の髪を優しく撫でていく。

「……ねえ、フィオおねえちゃま」

「なあに？」

「また、いっしょにあそんでもいい？」

フィオレッタは彼女のすみれ色の瞳を見つめながら微笑んだ。

「ええ。もちろんよ。約束しましょう」

「やくそく〜！」

ティナが小さな手を差し出し、フィオレッタもそれをそつと握る。

「ねえねえ、フィオおねえちゃま。ティナね、いまからはなたばもつくりたい」

「花束？」

「うん。おとうちゃまとおかあちゃまにプレゼントするの。ティナね、ちゃんとがんばってるよっていいの」

嬉しそうにスカートの裾をつまみ、花を摘み始めるティナ。小さな手に抱えられた花々が風に揺れ、その笑顔は春そのものだった。

「まあ、素敵ね。きつと、お父様とお母様も喜ばれるわ」

この子はきちんと両親に愛されていると伝わってくる。だからきつと、もうすぐ迎えに来るだろう。

「えへへ、そうかなあ。そうだといいな」

ティナはくるくると歩き回りながら、さらに白や黄色の花を集めていく。

フィオレッタは微笑みながら手伝い、そつと花束の形を整えてあげた。

「これで、完成ね」

「わあ……！　ありがとう、フィオおねえちゃま」

ティナは出来上がった花束を胸に抱え、愛おしそうに見つめている。

本当に愛らしい子だ。このまま幸せに暮らしてほしい。

気づけば、フィオレッタは会ったばかりのティナに、そんな感情まで抱いてしまっていた。

「ティナ。お父様とお母様はそろそろお迎えに来てくれるのかしら？」

そろそろ宿屋に戻って仕事をしなければならぬ。そう思っただけでフィオレッタが尋ねると、ずっと

明らかなティナの笑顔がふっと曇った。

胸に抱えていた花束をぎゅっと抱きしめ、俯いてしまう。

「……おとうちゃまと、おかあちゃまに、あいたい」

その小さな声は、まるで風にさらわれるようにかすかなものだった。

（もしかして、やっぱり迷子なのかしら……？）

ティナを安心させようと頭に手を伸ばしたとき、遠くの方から鋭い声が響いた。

「ティナに触れるな！」

「っ!？」

突然の怒号にハツとして振り返ると、茂みの向こうから黒衣の男が姿を現した。

銀髪に鍛え上げられた体躯。すらりとした長身が陽光を遮り、影がこちらに落ちたように感じる。

ただ立っているだけで、空気が一変するような威圧感。

普通の令嬢なら怯えてしまいそうなほど険しい眼差しだが、フィオレッタは別のことで頭がいっぱいになっていた。

（この御方……あのとき温室で助けてくれた方だわ）

フィオレッタを襲おうとした令息を追い払い、迷子に気をつけるとだけ言って去っていった人。

まさかこんなところで再会するなんて、誰が思うだろうか。

しかし、彼の表情はあのときとはまるで違っていった。

以前会ったとき、フィオレッタに興味がなさそうだった。覚えているはずがない。

底知れぬほどの冷たい眼差しがフィオレッタを射抜く。

「ティナから離れる。お前は何者だ」

低い声が空気を震わせる。

ティナはその剣幕にひどく驚いたらしく、花束を抱えたままフィオレッタの後ろに隠れてしまった。

「おじちゃま……！　ち、ちがうの、このおねえちゃまはやさしくしてくれたの。クーちゃんもなおしてくれたいよ！」

恐る恐る顔を出すティナの言葉に、銀髪の男はぐつと眉根を寄せた。

それでも警戒は解かず、ゆつくりと歩み寄ってくる。そして、フィオレッタとティナの間に視線を走らせ、まるで敵を見定めるようにその目を細める。

(困ったわ。なにかから説明しましょうか)

今の状況がよくわからないのはフィオレッタも同じだ。

それでもティナはフィオレッタから離れる気はないらしく、背に隠れたまま、スカートの後ろをぎゅうぎゅうと握りしめていた。

「見覚えのない住民だな。名をなんという？」

低く、命じるような声音。

フィオレッタはわずかに息を吸い、心が乱れそうになるのを抑えつけて顔を上げた。ここで怯えを見せてはいけない気がしたのだ。

「私はフィオと申します。ひと月ほど前にこの町へ参りました。宿屋をお借りして暮らしております」

男はしばし黙ってフィオレッタを見据えていた。青の瞳は冷ややかで、値踏みするような厳しさが宿っている。

「宿屋……ヨエルのところか。確かに新しい住民の届けが出ていたな」

そう言いながら、男はゆつくりと視線を落とし、顎に手を添える。

考えを整理するように、短く息を吐いた。鋭さを含んでいた目元がわずかに和らぎ——それでも、油断という言葉とは程遠い。

男の威圧感に押しつぶされそうになりながらも、フィオレッタは誤解だけは解かなくてはと静かに背筋を伸ばした。

「はい。教会での奉仕を終えて帰る途中、川のほとりで泣いているこの子を見つけたのです。困っているようでしたので……ぬいぐるみを少し縫ってあげただけです」

ティナがこくこくと頷き、両腕でクーちゃんをぎゅっと抱きしめる。

「ほんとうだよ。フィオおねえちやまがなおしてくれたの」

男はティナとフィオレッタを順に見やり、何かを凶るように沈黙した。

ただその様子を見ているだけで、フィオレッタに緊張が走る。だが同時に、このままティナをあつさり男に引き渡すまいと強く思う。

ティナが先ほどこの男のことを『おじちやま』と呼んだので、二人になんらかの関係があるのは間違いない。

とはいえ、ああして一人で出歩いていたのだ。誰かが彼女を狙っていた可能性もゼロではない。フィオレッタは一步だけ前に出て、まっすぐ男を見上げる。

「失礼ですが……あなた様は、このティナとどのような関係があるのでしょうか？」

緊張して、少し声が震えてしまった。男の目がぎろりとこちらを睨みつける。

フィオレッタは息を呑んだが、視線を逸らさなかった。

「俺はこの子の叔父だ。このエルグランド領の領主をしている。名は、ヴェルフリート・エルグランド」

「えっ、領主様……?」

驚いて間抜けな声が出てしまった。それは町人たちが時折、名前を口にしていた人物だ。(けれど待って、エルグランド辺境伯は別の方だったはず)

貴族名鑑で覚えたその風貌は、目の前の男とはまるで違っている。肖像画よりもずっと若く、そしておそろしいほどの迫力をまとっている。

フィオレッタが知らない間に、代替わりをしてしまったのかもしれない。

「視察で城下に下りていた。ティナは気晴らしのために連れてきたが、付き人が目を離れた隙になくなったようだ」

彼が一步近づいた、靴底が土を踏む音がやけに重く響く。

「……ごめんなさい、おじちやま」

申し訳なさそうにティナが小さな声で呟く。そして、フィオレッタのスカートの後ろからひよこりと顔を出した。

その仕草に、フィオレッタは安堵する。

この男——ヴェルフリートはティナに危害を加えるような人物ではないと、確信できたからだ。ならば、保護者のもとに返るのが当然だ。

「ではティナ。叔父さまのところへ行かないと」

優しく促すと、ティナはぶんぶんと首を横に振った。

「や——」

「ティナ……?」

もう一度促すが、ティナはフィオレッタのスカートを両手でぎゅっと握りしめ、涙目で顔を上げた。

「いやったらいやっく!! フィオおねえちやまもいっしょがいいの!!」

「ティナ、いけないわ」

「いやーっ! おねえちやまもくるのー!!」

ティナの泣き声が響く。

フィオレッタは困り果ててしまった。どうあやしてもティナは手を離そうとしない。

(どうしたらいいのかしら……このまま泣かせておくわけにもいかないし)

ちらりとヴェルフリートの方を見ると、彼は短く息を吐き、額に手を当てた。そのため息からは、諦めとも呆れともつかない感情が窺える。

「娘……フィオとあったか。今から城に来てもらうことは可能か?」

「城に、ですか?」

彼は領主だ。軽々しく断ることのできない響きに、フィオレッタは確認するように言葉を繰り返した。もしかしたら聞き間違いかもしれない、そう思いながら。

「ああ。エルグランド城に来てほしい」

エルグランド城とは、小高い丘の上にある城のことだ。山を背にして建つその姿は、まるで国を守る盾のように見える。国境を見張るその砦は、辺境の厳しい環境の中でもどこか誇らしげにそび

立ち読みサンプル  
はここまで

えていた。

平民として暮らすことになった以上、遠くから眺めることはあっても、あの場所に自分が足を踏み入れることになるとは思っていなかった。

(本当に、私に城に来るように言っているのね。どうしましょう)

フィオレッタにべったりとくっついていてティナの件だろうと予想はつく。ご令嬢を拐かしたとして取り調べを受けるのだろうか。

やましいことは何もないけれど、心の準備が追いつかないのも本当だ。

貴族とはできるだけ関わりたくないと思っていたのだから。

「ええと、今日はこれから宿屋の仕事を手伝う予定があります。一度連絡を取らせていただきたいのですが」

ひとまず冷静に。そう思いながら正直に答えると、声が少し揺れた。領主に対してこの言い方が正しいのか迷いもしたが、任されている仕事を放り出すようなことはしたくない。

「なるほど。君は働いているのだな」

咎める言葉が返ってくるかと思っただが、ヴェルフリートは静かに頷き、一定の理解を示したようだった。

ティナは頑として動かないと決めたようで、まったく動こうとしない。

ヴェルフリートは一度視線をティナに向け、そして再びフィオレッタを見る。

「宿屋の主人にはこちらから話を通そう。できる範囲で補償もすると誓う。申し訳ないが、城まで

同行を願えないだろうか」

少し前まで睨みつけるような眼差しだった領主は、今度は困ったように眉尻を下げていた。

彼は領主でフィオレッタはただの領民だ。強制的に命令することもできるだろうに、フィオレッタの事情を汲んだ上で丁寧に問いかけてくる。

(この子をお城に送り届けるくらいなら、いいのかもしれない)

ヴェルフリートの姿勢に、張りつめていた気持ちが少しずつほどけていくのを感じた。やむを得ない。

「……わかりました。お役に立てるなら、喜んで」

フィオレッタが受け入れると、ティナがパッと顔を上げた。その大きな瞳には、涙が浮かんでいる。

「フィオおねえちやま、いつしょ？」

「ええ。ティナ……ティナ様をおうちに連れていきますね」

辺境伯の姪めいということとは、ティナはエルグランド家のご令嬢だ。平民同然のフィオレッタが、気軽に名を呼んでいい相手ではない。

「やったあ！」

先ほどまでの目をウルウルとさせていた顔が嘘のように、今度は笑顔になる。その拍子に涙が柔らかそうな頬を伝った。

「協力に感謝する。では、同行願いたい」